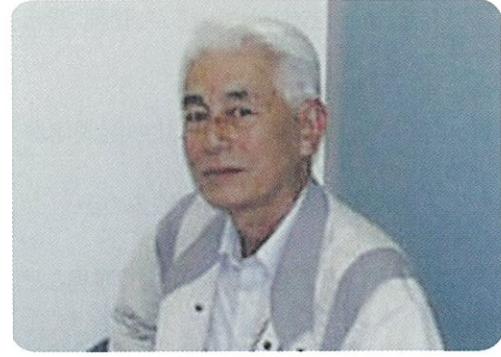


現場のプロに聞く(その2 地表踏査)

今回は資源から土木の調査まで幅広い分野で地表踏査をご経験してきた方々にお話を伺いました。ご両名共に「画伯」の異名を持ち、その精緻なマッピングは地質屋のあこがれの的でもありました。



藤井 克司(ふじい かつし)氏
昭和5年8月18日生 70歳 北朝鮮生まれ、香川県育ち



林 盛照(はやし よしてる)氏
昭和7年5月13日生 69歳 広島、呉生まれ、愛媛県育ち

プロフィール

ご両名共に昭和25~26年 住友金属鉱山(株)に入社され、以降一貫して別子鉱山の坑内、坑外調査を担当。別子鉱山が昭和48年に閉山になるに伴って、昭和49~51年からは住鉱コンサルタント(株)に配転となり、以降は道路公団、建設省等の地質、土質調査に従事。昭和60年まで正社員としてご活躍、ご退職後も平成11年頃まで若手の指導も兼ねた踏査やコア読みに力を発揮されてこられた。

——どうして地質の道に入られたのですか?

藤井、林)特に理由は無いが、面接時に「細かい仕事が好き」と言ったら「地質」に配属された。

——最初はどの様な仕事をなさっていましたか?

藤井、林)入社当社は、まず「うけ」(サンプルを籠で受ける)をやらされた。服装は、入社当初は上半身裸で、下は褲一枚。「うけ」は2ヶ月くらいで、すぐスケッチに回る。坑道内のサンプリングとスケッチが中心やったね。午前中は二人一組で坑内作業、午後はスケッチの整理がふつうやね。昭和32年頃までは地下足袋にゲートル、キャバンのスタイル。昭和32年以降、現在の様な保安靴、ヘルメット姿となった。

——地質調査の技術はどうやって学ばれたのでしょうか?

藤井、林)そりゃ、すべて独学。坑内や野外

作業で地質や構造の取り方(クリノメータで何を測るか)をひと(地質屋や先輩技術者)のやるのをみて覚えていった。スケッチも同様。研修の様なことは無かった。経験しかない。その結果として、フィールドの歩き方や地質(石)のみかたが身に付く。慣れてくれば断層などでも切れぎわを見ればどっちに動いたかが判るようになるし、(せん断面を)手でなでたりもする。効いてるかどうか(規模が大きいかどうか)、正逆の判断、これがもめとつても(破碎されていても)判る。特にどっちに動いたかが判らんと、困る(正しいマッピングが出来ない)しね。

——どの様な現場を経験されてきましたか。

藤井、林)別子がほとんどやけど、海外では東南アジアやトルコに行ったね。国内では北海道から鹿児島まで行ったね。豊予、青函の踏査や坑内スケッチもやったな。土木では中国自動車道の踏査をたくさんやったね。



三波川帯の地質図

「画伯」とお呼びしていますが、その「作品」は想像の産物などではなく、あくまで地層分布の忠実な再現であることに圧倒されます。

——特に覚えておられるお仕事はござりますか。

藤井) 各種の坑内スケッチ(1/100)、別子周辺のルートマップ。別子閉山前後にとりまとめた別子の鉱床断面図や鉱床全体図。鉱山関連以外では、金探の広域調査など。

林) 坑内スケッチやルートマップ。別子を集め大成した西部探査室時代の仕事。これらなんかは別子記念館やマイントピアに展示されている。(立体地質図ほか地質関連資料)青函の時の円形スケッチ(トンネル断面が円形などを平面の展開図にする作業)は大変やった。

藤井) 三波川帯のような細かい地層の場合、ハンマーと「タワシ」を使ってね、露頭を磨いて、層序(級化)の判定を行ったこともある。

林) 太陽の影で方向を定め、ルートマップを作成したこともある(影を測った時の時間を記録しておく)。

——フィールドを歩くときのコツは?

藤井、林) とにかく、目的を持つことが大切やね。歩き方や見方は経験することで、自然に身に付く。

林) 踏査に入る前に最初に当日の地形図を頭にたたき込む。そして地形状況と地質構造から地層分布を予測する。歩いている間は常に地質図が頭に入っていることが大事やね。また、予想通りの露頭がでてると楽しみでもあるね。とにかく、なんらかのkeyを追っかけて層序を組み立っていくことが大切だね。地形を把握しておくことは、その日の踏査工程を考える意味でも大切なものだし、踏査している間は集合時間に間に合うスケジュール

を常に歩きながら考えてるね。

——最後に若い地質技術者へのアドバイスをお願いします。

林) 歩く前に地形を頭に描いてほしい。地質の予測もできるし、当日の工程を組むことにも有効である。

藤井) 石の名前よりも構造を観察すること。岩石名は同じものは同様の記載をすれば良いし、チップでもって帰って聞くなり調べるなりすればよい。クリノメーターやプロトラクター等の正しい使い方は最低、マスターしないといけないね。

藤井、林) 体力が無いとかでなく、とにかくフィールドを嫌がらず、地質屋ならば歩くことが先決。歩いているうちにフィールドの中で他の楽しみ(例えば植物、同じ地層には同じような植生があるとか)も生まれてくる。

——70歳を迎ても、元気そのものです。地質屋として「当たり前のこと」を話されても、経験から来るのでしょうか、言葉の一つ一つに重みがありました。

地表踏査は地質調査の重要な要素技術であり、基本中の基本もあります。しかしながら昨今では、卒論のフィールドは敬遠されるなど、地質屋のフィールド離れが嘆かれております。今回のご紹介により、フィールドの重要性そして魅力を少しでも再認識していただけたらと考えます。藤井・林両氏の素晴らしい地質図に少しでも近い成果を認められるよう、地質屋として頑張りたいものです。

(平成13年6月15日 愛媛県新居浜市にて
住鉱コンサルタント(株)がインタビュー)